

近世南海地震時の土佐室津港における 水深変化量を記録した久保野家資料の史料論的考察

水松啓太* (高知県立高知城歴史博物館)

§ 1. はじめに

南海トラフで今後 30 年以内に M8～9 の地震が発生する確率は 70～80%と評価されている(地震調査委員会,2023)。

この確率は Shimazaki and Nakata(1980)の成果に基づく時間予測モデルを用いて算出されたものであり、使用された数値は高知県室戸市の室津港のもののみである。

この数値のうち、宝永地震後の隆起量 1.8mと安政地震後の隆起量 1.2mは今村(1930)が紹介した江戸時代に室津港の役人をつとめた久保野家に伝来した「手鏡」という史料に記載の数値を基としている。

近年、橋本(2020)などによって時間予測モデルの算出方法に疑義が示され、根拠となる史料の数値に対しても再検証の必要性が唱えられている。

なお、本報告は報告者が橋本(2022)などに提供した「手鏡」の史料性格などの情報を整理したものである。

§ 2. 室津港と久保野家資料

室津港は参勤交代や流通の便を図るために江戸時代前期の寛永年間と延宝年間の2度にわたって整備された人工港である。

久保野家資料の先祖書によれば、久保野家は承応2年(1653)に港の保守管理や出入船の管理を行う港番役を命じられ、明治初頭まで代々の久保野家当主が同役をつとめている。

久保野家伝来の資料群 80 点は令和 3 年に高知城歴史博物館が寄贈を受けており、現在は同館で保管されている。

§ 3. 「手鏡」の概要

久保野家資料の「手鏡」には港番役としての役務のほか、室津港の沿革や港の保守管理を担う定夫の人数、室津地域に関係する事件など内容は多岐にわたる。編年体ではなく、内容の配列に意味は見いだせないが、いずれの内容も港番役をつとめる上で知るべきものであったと考えられ、複数の「手鏡」には久保野家当主自身が作成者として記されている。

久保野家資料のうち、「手鏡」という語が標題で用いられている史料は3点。このほか、表紙の欠損などで標題が確認できないものの、「手鏡」の内容と類似すると考えられる史料8点を確認できた。これらのうち、今村(1930)が実見して引用した史料は幕末に久保野家

当主によって作成された『手鏡』(管理番号 16-2,以下略)と明治 16 年に作成された『室津港手鏡』(管理番号 9-2,以下略)の2点であると考えられる。

§ 4. 「手鏡」記載の水深に関する記述の分析

『手鏡』には①「先年湊満干大変以前」の港内と港口の満干値、②「宝暦九卯年改」の港内と港口の満干値、③「先年」の港内の満干値が記されている。

①と②は「右郷庄屋手帳ニ有写」、③は「庄屋反古之内ニ有見出し記ス」とあり、いずれも久保野家が第三者である庄屋の記録を写したものである。このため、測定時期や測定方法などが不詳であると考えられる。また、③は『手鏡』より溯る江戸時代後期に作成された『室津港関係書付』(仮標題,管理番号 15)に単独で記載されており、①と②の数値よりも早く久保野家が情報を入手したことが分かる。「手鏡」は編年体ではないため、単独で記載された③と①②の前後関係は不詳である。

『室津港手鏡』には安政南海地震後の水深に関して「汐四尺程ヘリ」という記載があり、時間予測モデルの 1.2m の根拠となっている。『土佐国大地震并御城下大火事且大汐実録』(高知県立図書館蔵,以下『実録』)には、「津呂、室津之両湊ニ限り、大変以後卯九月迄三、四尺地形高く成り候而、大船不入処、九月末頃ニ至り余程汐増ニ成リ」とある。この史料により「汐四尺程ヘリ」という数値は地震後半年以内のものと考えられるが、やはり測定時期や測定方法は不詳である。

また、『実録』の記述が伝聞情報であることに留意する必要があるが、水深の変化を「三、四尺」としているように 30cm の誤差を与える可能性がある。こうした 4 尺に対して誤差を与えうる史料は複数確認できており、『室津港手鏡』の数値に対してはより慎重な分析が必要である。

§ 5. おわりに

要旨では示せなかったが、今回の調査で諸史料から新たに宝永以前と宝永・安政間の水深の数値を確認できた。しかし、いずれも前後に浚渫が行われており、既知の数値との関係で発生確率を導くことは難しいと思われる。

「手鏡」に記載の数値は、現状でそれ自体の確度を担保できるものがなく、諸史料と比較するとなお慎重な分析が必要である。